

現代日本語における公的場面で行われる談話に関する言語資源の現状と開発

著者	馮 荷菁
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	2
ページ	52-55
発行年	2017
URL	http://doi.org/10.15084/00001505

現代日本語における公的場面で行われる談話に関する言語資源の現状と開発

馮 荷菁 (九州大学大学院 地球社会統合科学府)

The present situation and development of language resources about public discourse in modern Japanese

Hejing Feng (Kyushu University, Graduate School of Integrated Sciences for Global Society)

要旨

過去数年、語彙や日常会話などを中心とするコーパスが盛んになりつつある。だが、公的場面（例えば、ディベート、講演、法廷、国会会議など）で行われる談話を扱う言語資源が単一的であり、なかなかコーパスに入れないという現状となっている。したがって、本研究では、公的談話をジャンルごとに分類したうえで、言語資源ないしコーパスを構築する試行を検討する。

1. はじめに

近年、公的場面における談話の形式として、パブリックスピーキングの研究が挙げられる。ヒルマン小林・深澤（2009）は「パブリックスピーキング」という用語を提出し、「ある程度改まった場所で、一人の話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとする事」（p. 123）と定義した。また、ヒルマン小林・深澤（2011）は「社会性および専門性の高い言語行動を行うためには、単なる『会話』だけでなく、公的な性質を持つ口頭コミュニケーションである『パブリックスピーキング』（Public Speaking）の能力が不可欠である」（p. 30）という課題を提示している。このことから、公的場面におけるコミュニケーションのあり方を探る価値があると思われる。

本稿では、公的場面における談話の言語資源を整理・分析するうえで、今後の発展と研究方向を検討する。

2. 公的場面における談話の言語資源

現在、日本語ディベート、講演、法廷、国会会議など各場面ごとに有する言語資源を以下の表1に示す。

表1 公的場面で行われる談話に関する言語資料の一覧表

場面	日本語ディベート	講演	法廷	国会会議
言語資源	JDA ディベート大会 の文字化資料	NHK 文化講演会	記録メモ	国会会議録検索システム
	ディベート甲子園			
	国際日本語ディベート大会			

2.1 日本語ディベート

日本語ディベートは立論・質疑応答・反駁の3つの部分からなっている。立論部分のみ事前に準備した原稿を読むことができ、それ以外の部分では原稿がない、ということがルールとなっている。

JDA ディベート大会は、日本ディベート協会 (Japan Debate Association) が主催する日本人母語話者 (主に大学生と社会人がいる) を対象とする。年に春季・秋季の2回大会がある。しかし、すべての大会に文字化したトラスクリプトが公開されるわけではない。また、多くは文字化資料のみあり、音声データが少ないという欠点がある。この音声データが公開されていないのは政治的発言を回避するためであると考えられる。

ディベート甲子園は、全国教室ディベート連盟が主催する日本人中学・高校生を対象とする大会である。また、大会の記録を全国教室ディベート連盟より出版されている¹。しかし、すべての試合を記録したわけではないという現状となっている。

この二つの大会以外に、日本語母語話者と日本語学習者を対象とする国際日本語ディベート大会も近年九州・韓国・台湾で開催し始めている。しかし、文字化資料が少なく、且つ日本語学習者がいるので、発話形式上からみると、通常のディベート大会と異なっていると言える。

2.2 講演

谷口 (2004) で使用された分析資料は表 2 で示している。

表 2 4種の日本語の講演の談話資料におけるスピーチ・レベル・シフト²

資料	テーマ	講演者	主典	時間数	総文数	シフトの回数 (比率)
①	「源氏物語の魅力」	瀬戸内寂聴 (1998)	新潮 CD 講演	50 分	382	57 (14.9%)
②	「人間を信ずるとは」	五木寛之 (1988)	ワセダ・カルチャートーク	90 分	714	281 (39.4%)
③	「遺書を残された妻たち」	上坂冬子 (1984)	NHK 文化講演会	54 分	349	84 (24.1%)
④	「司馬遼太郎が語る 第四集 文章 日本語の成立」	司馬遼太郎 (1982)	新潮カセット講演	60 分	294	124 (42.2%)

文化講演会は、NHK ラジオ第 2 放送で放送しているラジオ番組である。全国各地で開催している講演会の中から、ラジオ放送に適した講演会を収録し、編集・放送している。現在は教育・日本人の生き方・自然環境のテーマにした講演を重点的に紹介している。

この講演の動画は YouTube にアップしたが、文字化した資料がまだ作られていない³。

¹ 全国教室ディベート連盟 (2001) 「第 6 回ディベート甲子園—中学/高校決勝戦・全記録」メディアクリエイト

² 表 2 は谷口 (2004) の p. 119 にある表 2 を引用している。

³ 本稿では、NHK 文化講演会のみ分析した。

2.3 法廷

田中 (2012) によると、調査期間は 2011 年 7 月から 9 月までの間、場所は北部九州にある 4 つの裁判所で行った。また、データ分析の素材は、裁判員冒頭陳述を一般傍聴人としてた際に自筆及び速記で記録したメモを用いた。裁判所における一般傍聴人はいくつかの制約があり、録音や撮影は禁止されているもの、メモや筆記用具を持ち込んで直接書き込むことは認められている。

しかし、法廷における談話のコーパスがあまり見られないということは現状である。

2.4 国会会議

松田 (2008) は国会会議録を分析資料として日本語の研究を紹介している。

国会会議録は、衆参両議院の本会議会議録と、その委員会記録を納めたものである。日本は 1890 年の国会開設以来、この記録が断続することなく連綿と続けられているという世界的にも稀有な記録を持つ国の 1 つであるが、この記録は従来印刷物としてのみ頒布されてきていた。衆参両院事務局と国立国会図書館は国会会議録フルテキスト・データベース・システムの構想を 1992 年より持ち始め、共同で構築作業を開始し、1999 年より一部公開が始まり、2001 年よりインターネット上での公開が本格的に開始された。

言語資料としての国会会議録の言語性質について、松田 (2008) は、「字句の整理を経た会議録は、言い誤り、冗長性、繰り返し、語順の乱れなどといった自然談話の特徴が修正されている。また、質問・答弁で原稿や資料を読むことも多い。当然これでは全くの自然談話とは見なせない。」(p. 25) と述べている。

国会会議録のほかに、同性質の地方議会会議録もある。高丸ほか (2014) によると、「地方議会会議録コーパスは都道府県または市区町村議会における議員や首長、行政職員などの発言の記録である。属性 (年齢・性別・肩書きなど) が明らかで、かつ、特定の自治体に居住する者の発言が、地域別・年度別に記録されている。」とされている。国家会議録と地方議会会議録を対照することにより、国家と地方の共通点と相違点を明らかにすることができると思われる。

3. 公的場面における談話のコーパス開発の試行

言語資料として分析するために、音声・文字データの両方を必要としなければならない。だが、公的場面で行われた談話の言語資料を概観したうえで、音声・文字のどちら一つのみ残されており、しかもその中の多くは言語分析のためのものではない、ということが明らかになった。

したがって、コーパス開発のために、音声・文字データの両方を提供しなければならない。そして、言語分析に適するために、語彙の問題 (誤字・脱字)、談話単位の認定 (句読点の打ち方、文の切れ方、段落の切れ方と関連)、言いよどみ・言い間違え・言い直しなどの扱い、といったことを解決しないといけない。

これらの問題を解決するために、まずもとの音声データを照らしたうえで、言語学専門の日本語母語話者に文字化する必要があると考えられる。ただし、ディベートのように話すスピードが極めて速く、何度でも聞き取れない場合は別の方法を取る。たとえば、現在の JDA ディベート大会の記録はディベート経験者あるいは参加者に文字化をしてもらうことが多い。しかし、この場合ディベーターたちは言語学専門の方ではないため、どれだけ正確に文字化することができるのかが問題となってくる。

また、場面ごとに文字化の基準を設置する必要があると考えられる。ディベート・講演・法廷・国会会議は発話形式と内容が異なるうえで、文字化するとき異なる基準を設けなければならない。この場合は各専門者に文字化をってもらう必要がある。基準を設定することにより、文字化資料を言語的分析することができ、制度的な公的場面における談話と日常会話との発話形式・機能上の相違点を明らかにすることが容易になるのではないかと。

4. おわりに

本稿では、ディベート・講演・法廷・国会会議という 4 つの公的場面で行われた談話の言語資料の現状を分析したうえで、今後さらなる改善点としてコーパスの開発の試行案を試みた。以下のような三つの試行際の問題点を示す。

- 1) 文字化の方は言語学専門家あるいは各専門分野の方なのか。
- 2) 具体的な文字化の基準をどのように設定されていくのか。
- 3) ディベートは政治的問題の発生を回避するため、音声データが公開されない場合が多い。その際、文字化資料の正確性が保証できなくなってしまう。
- 4) ディベートや国会会議では、原稿を事前に準備するので、その場で原稿をそのまま読む場合と、原稿を少し外れて読む場合がある。だが、本人である以外は知ることが難しい。

最後に言語分析として可能な点は以下に示す。

- 1) 国会会議を例に、文字化資料と録画（公開されているもの）を対照しながら、文字化資料と録画のずれ、原稿をずっと読むのかどうかを観察することにより、原稿にない発話を取り出して、使用の理由を分析する。
- 2) 国会会議録で可能な言語分析を考えるうえで、近代語研究における帝国議会議事速記録の分析が大いに参考になる。また、現代語研究における国会会議録と対照することにより、発話形式・内容を歴史的にどのように変化してきたのかを観察することができる。

文 献

- 高丸圭一・内田ゆず・乙武北斗・木村泰知（2014）「地方議会会議録におけるオノマトペの出現傾向に関する基礎的検討—少数の自治体に高頻度で出現するオノマトペについて—」『言語処理学会 第 20 回年次大会 発表論文集（2014 年 3 月）』566-569
- 田中弘恵（2012）「法廷における談話分析」『Kyushu Communication Studies』Vol.10 1-13 日本コミュニケーション学会九州支部
- 谷口まや（2004）「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」『早稲田大学日本語教育研究』4 117-129
- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ（2009）「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」『JASS-CJLE2009日本語教育国際研究大会（オーストラリア ニューサウスウェールズ大学）予稿集』 p. 123
- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ（2011）「日本語教科書における口頭発表指導について：日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究」『金沢大学留学生センター紀要』14 29-42
- 松田謙次郎（2008）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房

関連 URL

- | | |
|-------------------|---|
| 日本ディベート協会 | http://japan-debate-association.org/ |
| JDA 日本ディベート大会の文字化 | http://japan-debate-association.org/contest/history |
| 全国教室ディベート連盟 | http://nade.jp/koshien/index |
| NHK 文化講演会 | http://www4.nhk.or.jp/bunkakouenkai/ |
| 国会会議録検索システム | http://kokkai.ndl.go.jp/ |